

聖書:テサロニケ人への手紙第一4章1~12節

説教:聖なる者となるために

はじめに

パウロは第二回目の伝道旅行のときに立ち寄ったテサロニケで福音を語ったところ多くの人たちが信じ、やがて教会が建てられます。ところがのことを快く思わなかった町の人々はパウロを激しく迫害し、パウロはコリントという町にまで逃れなければなりません。そのとき一緒に働いていたシルワノとテモテはなんとか町の近くに踏みとどまり、生まれたばかりの教会を支えようと頑張ります。でも、パウロを町から追い出すほどの迫害をした人たちが、次に教会を迫害してくることは確実でした。パウロはコリントに逃れてからも、そのことをずっと心配し、もう一度テサロニケに戻らなければと何度も願うのですがどうしてもかえません。そこでテモテを遣わし、教会の様子を見てきてもらう。戻って来たテモテから報告を聞いたパウロは、「あなたがたの信仰はすばらしい」と喜びます。ところがよく読むと手放しというわけではない。3章10節で、「あなたがたの信仰で不足しているものを補ってくださるようにと、夜昼、熱心に祈っています」と語り、なにか不足しているものがあることを匂わせています。今日開いている4章の最初で、「最後に兄弟たち。主イエスにあってお願いし、また勧めます」と、まるで意を決するかのように教会の問題を具体的に示していきます。そのことを見ながら、では私たちはどう歩むのかを考えていきます

## 1 歩む目標

### 1) 神を喜ばせるために

私たちはあるとき神を信じ、洗礼を受け、その日からクリスチャンとして歩んでいます。改めて考えますが、いったいどこに向けて歩んでいるのでしょうか。1節には、「あなたがたは、神に喜ばれるためにどのように歩むべきか私たちたちから学び、現にそう歩んでいる」とあり、私たちの歩むべき目標は神に喜ばれることだとある。

ある牧師から聞いたことですが、その先生が神学生のときに奉仕していた教会では、安息日を守るということから「日曜日に買い物をしてはいけない」と教えられていたそうです。ところが、ちょうど日曜日に車のガソリンがなくなってしまう、教会に車を置いて電車で帰ったことがあるとぼやいていたのを思い出します。神を喜ばせるためにとい

う目的はすばらしいのですが、いつの間にか聖書に出て来る律法学者、パリサイ人ようになってしまい、息苦しい生活を強いてしまうことがあります。

### 2) 真の自由

ガラテヤ書5章1節にこうあります。「キリストは、自由を得させるために私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは堅く立って、再び奴隷のくびきを負わされないようにしなさい。」

イエスは私たちを真の自由へと解放するために来られたはずですが、ですから、「神に喜ばれるために」ということは、なにかしめ面をして頑張る努力することではなく、神も喜び同時に私たちも一緒に喜ぶ、そんな歩みであるはずですが。「私ひとり」ではなく「私たち」と複数となっているところが重要です。そのことは、パウロがこの手紙で伝えようとしている大切な点でもあります。次にそれを考えます。

## 2 命令

### 1) 自分のからだを聖なる尊いものとして保ちなさい

テサロニケ教会の信仰に偏りがあることを知ったパウロは、具体的にいろいろな命令をしています。その中から二つ取り上げます。一つ目は4節です。「一人ひとりがわきまえて、自分のからだを聖なる尊いものとして保ち」なさい。なぜそうするのかと言えば、「神のみこころは、あなたがたが聖なる者となること」だから。その具体的な内容として、「淫らな行いを避け」て「兄弟を踏みつけたり欺いたりしてはいけない。」そのようにつながります。

なぜこのようなことを書かなければならなかったのか。それは次に見る二つ目の命令とつながっていますのでそれを見ていきましょう。

### 2) 自分の手で働く

11節です。「また、私たちが命じたように、落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くことを名誉としなさい。」ひとこと言えば、自分の手で働いて誰の世話にもならず生活しなさいということになる。もちろん誤解のないように付け加えますが、これは病気や身体の障がい

があるとか、やむを得ない事情がある人のことまで含めて言っているではありません。ここで問題にしているのは、働こうと思えば働ける環境にあるのに、働こうとしない人たちのことを言っている。どうして働こうとしないのか。もともとは彼らは働いていた人たちです。それが理由から自ら進んで働かなくなり、人の世話になって生活するようになった。中には、兄弟を踏みつけて欺き、今日楽しければそれでいいんだ考える人が出てきた。いったいなぜそうなったのか。

### 3 主の再臨のとき

#### 1) 極端な考え方

その手がかりは3章13節のパウロの祈りの中にあります。「あなたがたの心を強めて、私たちの主イエスがご自分のすべての聖徒たちとともに来られるときに、私たちの父である神の御前で、聖であり、責められるところのない者としてくださいますように。アーメン。」

このなかで特に、「私たちの主イエスがご自分のすべての聖徒たちとともに来られるとき」に注目します。テサロニケの教会は、いつ主が聖徒たちとともに来られるのか、そのことに関わり強い関心を抱きます。私たちは主の再臨を信じてはいても、それがいつであるのか、あまり議論しません。でも彼らは主の再臨の日がいつであるか非常に気にした。理由は簡単です。テサロニケ教会が迫害を受けて苦難にあっていたから。それでこんなことを言う人たちが出て来た。「クリスチャンである自分たちがいつまでも苦しむはずはない。必ず主が再臨して私たちを苦しみから救ってくださるはずだ。その再臨の日は近い。」この「近い」と言うところに微妙な問題がはらんでいます。ある人たちが、「ここ数年以内」とか「明日かも知れない」と言い始めた。そうなるとうどうなりますか。明日、主が来られるのなら、今日苦しみながら一生懸命働く必要があるのか、ということになる。もうそんなことをしないで、たくさん持っている人の所へ行って御世話になればよい。どんどん極端な方向に行く。

言うまでもなくこれは二つの点で間違っています。一つ目。そもそも、主の再臨の日に関して言えば、その日がいつであるかは父なる神お一人以外だれもわからない、その日はまるで盗人がやってくるように突然思いがけないときにやってくるのだと、イエスは教えてくださったのですから、「来年に来るに違いない」とわかったような言い方をすること自体が間違っている。

二つ目の間違い。自分は働かずに、兄弟を踏みつけたり欺いて生活しようとする。この人たちが考えていることは、ひたすら自分のことです。自分が良ければほかの人はどうでも良い。でも最初に言いました。「キリストは、自由を得させるために私たちを解放してくださいました。」きちんと「私たち」と書いてある。自分もそうですが、周りの人たちも含めてみな自由にされたのですから、自分ひとりが良ければ良いと言うことにはなりません。

私が中学生か高校生のときでしたが、明日テストがあると言うときに、テスト勉強が思うように出来ない、地震とか火事が起きて学校が休みになれば自分ひとり勝手に願ったことがあります。テサロニケの人たちの信仰はなんだかそれに似ています。

#### 2) 聖となることは神のみこころ

もちろん私たちはテサロニケの人たちのような極端な考え方はしません。主の再臨の日はいつであるのかわからなくても、一日一日を最善を尽くしながら歩もうとします。パウロから命令されずとも、みなさんが誠実に神の御前を歩もうとしていることを私は知っています。そして、どこに向かって歩んでいるかについても、はっきり知っています。パウロが祈ったように、主の再臨の日に私たちの父である神の御前で、聖であり、責められるところのない者となるように、そのことを目指して歩みます。

#### 3) 聖さにあずかる

ここで問題です。では、いったいどうやって聖なる者となるのでしょうか。やはり、「神を喜ばせるために」と必死に歯を食いしばって聖さを獲得しようと努力するのでしょうか。

パウロはなんと言っていますか。7節。「神が私たちを召されたのは、汚れたことを行わせるためではなく、聖さにあずからせるためです。」

ここは、「聖くして下さるために私たちを召したのです」とも訳することができます。聖くして下さるのは主です。自分ではない。それはどのようにしてなされるか。神は、私たちを聖くしようとして聖い光を私たちにあてます。その光は天国に近づくに従って少しずつ強くなる。そうするとどうなりますか。聖い光に照らされて罪がどんどん見えてきます。それで私たちは言うことになる。「主の再臨の日に、父の御前で聖であるなど、私には全く自

信がありません。むしろ、責められるところがたくさんある。」

変な言い方かも知れませんが、それでいいのです。自分の罪を知れば知るほど、神の御前に立つ資格がないとわかる。主がみなさんを聖くしようとしているのでこうなる。けれどもそこがっかりする必要はない。聖くない私たちですが、主の再臨の日、主ご自身が父なる神の御前に立ってください、仲介者となって私たちを弁護してくださいませ。それが救いと言うことの本質です。

この約束がどれだけ確かなものであるか、どこを見たらわかるか。主の十字架です。そこにすべての約束が示しています。そのようにしてくださった主に感謝します。